

17 世紀狩野派の白澤図像

岡部美沙子（関西大学）

本発表は今まで白澤以外の霊獣と考えられてきた狩野派の図、すなわち、狩野探幽筆「飛禽走獣図巻」の白色獣、日光東照宮の白色獣、鶴川常雲筆「金地唐獅子図屏風」右隻の白色獣が白澤を描いたものであることを明らかにし、17 世紀の狩野派が白澤をどのように表現し、受容してきたのかを考察する。

白澤は中国で生まれ、朝鮮・日本・琉球に伝播し、受容されてきた神獣である。白澤は徳のある王者の前に出現する獣として、あるいは辟邪の獣として人々に理解されている。その図像は中国では虎首龍身、あるいは龍首獣身の姿であるのに対し、日本では人面牛身図像が主流となっている。しかし、日本でも中国と同系統の獅子に似た姿（以下獅子型とする）の図像があり、それを描いているのが 17 世紀の狩野派である。

白澤は知名度が低く、他の動物と混同されている可能性がある。問題となる白色獣は、それぞれ麒麟や獬豸、獅子とされてきた。狩野派の獅子型白澤の図像は、白色の獅子に似た姿で、頭部に角があり、脚からは火炎のようなものが立ち昇っている。上記の白色獣もこれらの狩野派の特徴を有していることから、白澤を描いたものであることがわかる。

白澤が他の動物と混同されたのは、粉本に名称が記されなかったことに一因がある。そのため、図像は伝わっても名称が伝わらず、他の動物と誤解されたのではないだろうか。また江戸時代中期頃より、寺社の装飾やお札、厄除けや病除けの護符、浮世絵などに人面牛身の白澤図像が用いられて広まると、獅子型白澤図像への認識が薄れ、狩野派の絵師も次第に人面牛身の白澤を描くようになる。

では、獅子型の白澤は 17 世紀の狩野派にどのように理解されていたのだろうか。狩野派の獅子型白澤の初出となるのは、狩野探幽が描いた日光東照宮の白澤の図である。探幽は『探幽縮図』の中で、雪村のものとしてされる人面牛身の白澤を描くなど、白澤図像には獅子型と人面牛身の二種類があることを知っていたが、探幽は獅子型白澤図像に「有徳の王者の前に姿を現す神獣」としての姿をみていたため、獅子型の白澤を選択したといえるだろう。すなわち探幽は日光東照宮拝殿という場には獅子型白澤が相応しいと考えて白澤を描いたのである。

狩野派は探幽以降、獅子型の白澤を屏風などの大作に描いていく。つまり、大型の作品を注文することができる有力な依頼主の要請に応え、その家格に相応しい画題として獅子型白澤が採用されたということである。17 世紀の狩野派はそうした依頼主の権威・威信を表現するものとして獅子型白澤を捉え、中国で 1609 年に出版された『三才図絵』や 16 世紀中葉に成立したとされる『十二霊獣図巻』のような資料に倣いながらも、立体感を示す肥瘦の線描を用い、白澤がその場に存在しているような感覚を鑑賞者に与える作品を制作したと考えられる。